

## より困難な登山を目指して

小西政継

こんなタイトルの原稿をこの歳で書くことにいささかうしろめたさを感じる。血気盛んな20代、30代の頃なら、第一線で冬のアルプスの北壁やヒマラヤのバリエーションルートに登っていたのです。なり話すことができたと思うが、もうかれこれ10年前に困難な登山をやめてしまっているからである。従って、ここでは自分のスタイルで追求した1970～80年代の足跡をふりかえり話しておこう。

僕が山登りに夢中になって、より困難な登山を目指しはじめたのは、もうかれこれ30年前にもなる25～26歳の頃からである。24歳の時に病気をして2～3年活動できない時期があった。この時やることがないので山の本を本格的に読みはじめるようになり、しばらくしてから本を読む面白さにひきづりこまれた。山行に費したお金と精力を全て本にきりかえたのだから、たちまち下宿の狭い部屋が山岳書で埋まり、毎晩夜中の2時、3時までというぐあいになった。アルプスやヒマラヤを舞台にした世界第一線たちの登攀記は夢と希望と将来の自分の方向性を与えてくれた。一冊の登攀記を読みまず凄いなあ—と思う。今度は実際に自分がこの登攀を実践すると仮定すると、もう一度読み直し、ポイントの部分全てをノートに写すようになる。当時は冬期の滝谷や一の倉沢程度の経験しかなかったの、なにか新しい世界への扉が開かれたでっかい気分となり、やがては国内の登山より、本を読む分野のほうがはるかに充実した山行のようになってしまった。

ふりかえって考えてみると、山行ができなかったこの時期の2～3年が僕の以後の登山の方向性の基本をがっちり作ってくれたし、大きな山は計算づくで登らねば成功できないことも知った。

一つの山を読みこみ成功させる計算分野ではトポの作業は本当に夢中になってやった。例えばアイガー北壁を登ると仮定すると、壁の各ポイント部分をヘックマイヤーはこう攀じ、ハラーはこのように感じ、レビファはこうだったことをすべてノートに写しこむ。さらに悪天、晴天、壁のコンディションまで付け加えていくと、なるほど、なるほどとなり、最終的にオレでも登れるな—という夢がわきあがってくる。またこんな感じでノートに写すと頭の中にしっかりデータをきざみこんでくれる。この積み重ねが総合的な計算能力を高めて、困難な登山を追求し成功させる原動力となる。ヒマラヤの巨峰やアルプスの壁をこのようにその気になって一つ一つ勉強していくと、2年や3年では卒業できないだろう。また、こんな勉強は同時に山を登ること以外のプラスが自然に生まれ、登攀記録を書く際の文章の表現能力が身についてくる。文才などまるでない僕がこれまで何冊かの本を書けたのも、トポをやってきたおかげである。

若き日々のこんな時代、世界の登山界ではヒマラヤ8000m峰の初登頂時代が終了し、次により困難を目指す鉄の時代に突入していた。ヒマラヤでは巨峰のバリエーション、アルプスでは冬期北壁時代。

## 1. 高所登山の実践と課題

一方日本では外貨問題もあり、自由に誰しも外国に行ける時代ではなかったので、海外遠征の主役はJACや各大学山岳部に限られていた。これらの登山隊は一般ルートからのポラーシステムが主力であり、世界の検舞台でより困難を目指すにはほど遠く、世界レベルとの格差はいかんともしがたいものがあった。本を読めば読むほど日本登山界のレベルの低さを強烈に感じた次第である。日本人はなぜもっとより高きより困難な登山を目指さないのだろうか——とも不思議に思った。病気が治り再び山学同志会での活動をするにあたって、僕は一日も早く、マナスル登頂時代のような古典から脱皮し、世界のレベルを目指そうと思った。

こんな気持だったので、実践の第一歩は1967年の冬期マッターホルン北壁からスタートさせた。当時盛んにやられていた夏期の北壁からの日本人初登攀には目もくれず、いきなり世界レベルの厳冬期からの出発となった。「国内のキャリアしかないくせに、いきなり冬期などできるわけない！」とだいたいRCCIIの親分衆から批判されたが、僕はニヤニヤ笑っていられる余裕があった。北壁を50mずつくぎった完璧なトポと自然条件に対応したトレーニングを2年間、厳冬の滝谷の寒気と烈風の中で黙々とこなしてきたからである。登攀は計算どおりに第三登で成功した。うれしかったことは記録よりもアイゼンを失い登山靴のみでも登れたこと、もう2～3日ビバークしてもOKの体力がまだ残っていた。トレーニングの成果が実を結んだことである。この成功は以後の僕のビククライムに大いなる自信となった。

ヒマラヤ8000m峰のバリエーションを陥すには5名以上の強力なメンバーが必要となる。一步でもこの夢に近づくために、次は若い会員たちのレベルアップ作業、すなわち戦力強化に着手した。この作業はかなりの労力と期間を要するが、仲間たち一人一人を国際的なレベルに引き上げるやりがい、いつの日か町の小さな山岳会を大組織（日山協、JAC、RCCII）に登攀内容でぬきさってみたい個人の希望もかなえられることでもあった。8000m峰の巨大なる岩壁は垂直のポラーとなるので、目標となるトレーニングの場として厳冬のアイガー北壁直登ルートを選んだ。

まず会員たちをオレの言うとおりのトレーニングをすればアイガーは絶対に登れる！と思いこませ、洗脳した。次に僕はアイガーを徹底的に調べつくし、これにみあった2年間にわたる国内でのトレーニング計画を作成し、厳冬の滝谷、鹿島槍の北壁、荒沢奥壁、一の倉沢等で実践させた。

1970年の冬期、アイガー北壁直登ルートは43日間の垂直のポラーのすえ、第二登に成功し、ヒマラヤへの夢にまた一步近づいた次第である。アイガーのメンバーたちは当時、他の社会人山岳会の人たちとくらべても、ほぼ同レベルの力量であったが、格差は大きなスケールで目標を目指した自己改革の部分である。国体レベルを目指す意識でトレーニングでると、オリンピックを目指すのかの違いでもある。僕は本番直前にJACのエベレスト南西壁参加が決まりアイガーには行けなかったが、この北壁を読みこなし自分の計算がぴったり合っていたことに満足した。

1969～70年のエベレスト南西壁（JAC）は僕にとって初めてのヒマラヤであり、初めての8000m峰

## 1. 高所登山の実践と課題

であり、初めてのバリエーションルートであった。結果的に失敗に終わったものの多くの貴重な体験をさせていただいた。偵察、本番と約1年間のエベレスト通いはアルプスの北壁とはまた違ったヒマラヤの高峰を攀じる計算能力が身につく以後の山学同志会での数々の遠征を成功に導く原動力になっている。

この大学系の遠征に参加して素直に感じたことがいくつかあった。第一は個人装備とこれにともなう技術の格差である。大学系は尾根や稜線を歩くポーター主体でこれまでやってきたので、従来の日本の冬山を登る装備に対して、僕のアルプスの壁を登る装備と違って当然のことである。急峻な氷雪壁を8本爪で登るのと12本爪のアタックアイゼンではスピードが5～6倍違ってくる。第二は登頂に対する基本の考え方の違いである。30名の隊員で3～4名登頂して大成功とする考え方と作戦は僕には納得できないものがあった。30名の男たちは山頂に立ちたい一念で人生を左右する仕事をなげうち、辛い準備や荷上の労働をするからには、隊長たる者は全員平等に登頂の機会を与えるのが義務であろう。そして、最終キャンプから全員が、全力をあげて山頂を目指し強い人は登頂し、弱い人は断念し、失敗しても一人一人が納得し、さわやかに終わる遠征となるはずである。

当時の日本登山界ではこんな僕の考え方は笑われてチョンであり、一方ヨーロッパの登山界ではこれが常識であった。この違いは、まさに世界とのレベルの大きな差であった。日本の常識と意識をいつの日か改革する——これも当時の僕の困難性を追求する課題でもあった。大学山岳部出身者がヒマラヤにおける困難な登山分野で誰一人として世界レベルに達せられなかったのは、古めかしい考え方にこりかたまった指導者たちの責任でもある。

1971年の冬期グランドジョラス北壁第三登は僕の重大失敗作である。120%の成功への自信が自分の甘さとなり、僕も含めて4名の仲間たちの足指を凍傷で27本も切断するはめになったからである。厳冬のアルプスの北壁は厳しい。悪天につかまり、ちょっとした気のゆるみで食糧を失ったこと、大人数を引きつれて登ったことがこのような結果になった。

足指がない足が正常に戻るまで3年かかった。この間一人前に結婚もし、子供もできた。マッターホルンやモンブラン、アイガーの稜線でトレーニングし、3年目の終りにやっとモンブランのイタリア側の1000m位の壁を登りきれぬまでに回復し、またヒマラヤへの夢が広がってきた。

1976年のジャヌー北壁はカムバックの第一歩となった。ジャヌーは20代の頃から憧れの高峰だったし、南西稜から登頂したフランスの第一線メンバーたちは、僕にとっての神祕的存在であった。この強者たちは当時「ジャヌーの北面は絶望的であり登攀は不可能！」と話していた。ならば現代に生きる僕たちが全力をあげて可能にしてみよう、これこそ困難を追求する本物の登山の真髄であるという闘志をこめて、無酸素、全員登頂の目標をかかげて挑んだ次第である。

7710mの山頂まで数千mのザイルをフィックスし、隊員16名のうち13名が第1次～4次にわたって登頂に成功した。ヒマラヤを目指したトレーニングであったアイガー北壁直登とエベレスト南西壁の

## 1. 高所登山の実践と課題

体験が見事に一つに結実した成果である。遠征で僕が最も辛かったのはこの北壁を登ることよりも、全員を登頂させるための作戦の組立であった。ある時はトップに立ちルートをひらき、ある時はルート整備をやり、またある時は荷上をやる活動の中で全隊員の順化の進みぐあいと体調をチェックしながら最終場面です足を揃え登頂させる作業は、自分の1日の活動が終わってから組立てるだけに実に厳しいものだった。

4年後の1980年、僕たちはいよいよ8000mの巨峰に狙いを定め、カンチ北壁を目指した。壁の技術的な難しさはジャヌーよりはるかにおちるが8600mを無酸素で陥す高度への挑戦となった。「いくら同志会でもこれは無理よ!」とさんざん経験者から陰口をたたかれたが、僕は自信満々だった。69年の偵察の時、エベレスト南西壁8000m地点まで無酸素で登りタバコをプカプカ吸っても平気だったからである。結果はメンバー7名中、6名が山頂に立った。僕だけ登頂に失敗し悔しい思いをしたが、次への闘志に気持ちを切り替えてすっきりさせた。この時すでに42歳、体力もそろそろ落下線に入り、そういつまでも第一線でいられないな—とも感じた時期でもある。

次の1981~82年の日山協隊のチョゴリ北稜は自分のプランではない。日中国交正常化10周年記念登山で新貝さんや湯浅さんたちが主力で計画していた登山隊であったが、登攀隊長を依頼されお受けしたものである。カンチとはほぼ同高度の山頂なので必ず成功させる自信はあった。この登山隊に参加した興味の第一は全国公募の混成隊を自分の力でコントロールできるのか、できないのか、自分の能力に対するテスト。また自分で育ててきた同志会の若手が、他の山岳会の強者たちとくらべて、どの程度のレベルなのかをみることができると楽しみもあった。第二はこれまで行われてきた大組織の遠征内容の改革である。人脈や組織のコネを優先して隊員を選定してきた常識をやぶってみよう—であった。それまでたいして力量もない隊員を集め、「日本最強隊!」と称してただけに、実力主義で本当の最強隊を組織して世界に日本のレベルを示すチャンスにもしたかったわけである。第三は隊長たる者はBCにでんと座り、トランシーバーをかかえて指揮するのみではいけませんよ—のサンプル作りである。こんな馬鹿げたことをいつまでもやってるから、日本の登山界のレベルはいつまでたっても世界のレベルにおいつかないのである。直線高度差3700m、未登のルートからシェルパ・レス、無酸素、全員登頂で仕上げれば後に続く日本の登山隊の意識も必ず変わると思ったし、これからの若者たちがより困難を目指して、メスナーやククチカに一步も二歩もおいつく闘志をわかせてくれるきっかけにもしたかった。

BCへの10トンの荷上は現地にはポーターやシェルパがいないので、日本の若者たち有志30名の男たちの協力を得た。彼らの力なくしてはこの遠征は成り立たなかったし、山頂にも立つことができなかった。今でも僕は彼らには感謝している次第である。

北稜7550mのC3から8611mの山頂までは高度差1000mの急峻な氷雪壁であり、最後の勝負のポイントとなった。いくつもの8000m峰に登頂してきた経験豊かな強者たちのみの集団なので、各自の責

## 1. 高所登山の実践と課題

任においてノーザイルで自由に山頂を目指してもらった。第1次、第2次と成功したが、柳沢隊員の墜落事故で第3次は中止した。僕個人はこの登山でどうしても山頂に立ちたい一念が強かっただけに、事故発生の不運を8000m地点で聞いた時は隊長の役目がうらめしかった。

登頂の場面では、一流の若者たちの紙一重の実力の差を確認することもできた。全員体力、技術、精神力ともにはほぼ同一であったが、その場面、場面で自分の力と山頂への攻撃を読み込む総合的な計算能力が紙一重の実力の差となって現われた。成功と失敗、生と死の別れ道はまさにここにある。力がありながら失敗した尾崎隊員は、ちょっとしたルート選定のミス、墜死した柳沢隊員は8300mでの一夜のビバークに耐えられる力がなかったのである。1年後のエベレスト南稜でも柳沢隊員と全く同じ事故が発生している。

1983年秋のエベレスト南稜は1967年～70年にアルプスの冬期三大北壁をまとめ、次にカンチ、チョゴリそしてエベレストと世界の第一位～三位までをこの遠征で完了させる目的があった。同時に僕は45歳、いやでも第一線から身を引かざるを得ない歳になったので、次の世代を引きつぐ者へのリーダー教育の場にする必要もあった。

南稜はウエスタンクームから、南峰へ一気にせりあがる岩と氷と雪の壁である。7900mから南峰までが核心部となるが、隊の力不足で最終場面ではこの核心部をエスケープし一般ルートから無酸素で2名の隊員が登頂した。チョゴリの仲間だった吉野、禿両君もイエティ一人隊で我々のメンバーと共に無酸素で登頂した。しかし、登頂後8750m地点でビバークとなり翌朝、南西壁へ墜落し消えてしまった。同志会の2名と両君との登頂時間の差は30分位である。同志会は8200mまで下降しビバーク。翌朝、僕とすれちがった時「小西さん、タバコ下さいよ！」の余裕があった。8500mを越した巨峰の無酸素登山は体力のあるかぎり、たとえ四つんばいになっても1mでもいいから、下へ降りろ！の基本を彼らはきちんと実行した成果であろう。吉野、禿両君もこれからの登山界をリードしていく優れたアルピニストであっただけに残念だった。またこの手で力を貸し、アドバイスしてやれば死なないですんだかもしれないと反省している。

チョゴリ北稜の登頂後のビバークでこの吉野、禿は足指が凍傷になり帰国後、切断している。「身体障害者の仲間ができてオレはうれしいよ！」と冗談を言ったものである。下山後のBCで彼らとはこんな会話をしたことがある。

「緊急用の酸素ボンベがあるのに凍傷になったら、なぜ吸わないんだ！指が助かったかもしれないのに」

「小西さんが無酸素と言ったから、吸っちゃあーまずいと思ってえー」

「……馬鹿ヤロー！意味が違うよ！」

こんな自分の子供みたいな両君だっただけに、残念としか言いようがなかった。

僕は南峰8700mまで到達し、時間ぎれとなり、8400mでビバーク。翌日下山し、オレの力はここま

## 1. 高所登山の実践と課題

でと、わりきって青春の登山活動に一区切りをつけた。登頂できなかったのは、南峰から山頂をみて、今の自分の力で山頂へつっこめば70%は死、30%は生の計算ができたからである。18歳から登山をスタートして27年間、自分でもよくぞこんなに長い厳しい道に耐え歩んできたと思った。若き日々確立した自分のスタイルを最後まで貫き通せた満足感もあった。手段を選ばず一般ルートから登ったり、酸素を吸えばたくさんの8000m峰の山頂に立ったかもしれないがこれまた一人の男の主義である。

それから10年が過ぎ去った。この10年はサラリーマンをやめ、会社を設立して独立し、仕事に首までつかってがんばりぬいた辛い10年でもある。登山と同様、商売の常識から一歩ぬけてた仕事や会社経営に挑み、やっと落ち着くことができた。困難に挑むことは社会の中でもできることである。会社をやめ自分一人の力で、いかに生活できるかを追求すればよい。はっと気がついたら、もう55歳、再び昔とったきねづかで登山を再開し、最終ラウンドの人生は山で終らせることにした。若い頃、興味が全くなかった8000m峰の一般ルートは、これから楽しむ老後の登山にはもってこいであると思っている。

(山学同志会員)